

に於て本書の如きは我々の久しく求めて得ざりしものであつた。固より佛教の知識に昏き私は専門家から見て此書は何程の價值あるものであるかは知らない。併し我々は此書を讀むことによつて佛教の根本精神の何處にあるかを知り其精神の何たるかを知り併せて正道に進まんとする異常なる感奮を覺ゆる者である。我々は此感奮を基として本書の研究が若者の希望せる如く徒に無生命に終らざりしことを斷言し得るであらう。獨り佛教界のみならず廣く我國の思想界に此書の如き眞實なる研究を得たることは我々の著者に對して感謝せねばならぬ所である。東京神田神保町岩波書店發行定價二圓五十錢（山内得立）

教育哲學概論

ジョンデューワイ著
梶 足 理 一 郎 譯

本書は其の序論に於て譯者が斷つて居る様に、Dewey の "Democracy and Education" の全譯であるが其の内容を窺つた者は、「教育哲學概論」の標題の下に公にせられた所以に首肯するであらう。

本書は卷頭に譯者自身の手に成つた「デューワイの哲學」を序論として掲げ次に譯者の緒言を記し、以下二十六章に渡つて原著の全譯を示して居る。全體として論述詳細を極め、例を卓近な所に求めて居る點も可なりに多く、やゝもすれば無意味乾燥に流易い此の種の著述としては、讀者を惹きつける力に富んで居ると言へよう。本書を讀むには、最初に、第二十四章「教育哲學」を讀む方が便利である。といふのは同章に於て、著者の狙つて居る點、本書に於ける敘述の順序を概括して簡明に述べて居るが故である。

こゝに、其の大體を摘録して紹介の一端にしたいと思ふ。先づ第一段（一章より五章まで）に於ては、教育の社會的必要及び職分を明かにし、且つ社會團體が自己生存を維持する過程としての教育の一般特質を概説して居る。即ち教育は一方に於て、或人と兒童との日常交際に依る無意的經驗傳達の過程たると共に他方に於て、社會が自己の存続を確保せんがために施設せる有意的經驗傳達の過程なりとなし、かくの如き意味の教育は當然未成熟なる兒童の指導及び其の成長を助長すると共に其の兒童の棲息する社會自身の指導及び助長をも意味するが故に、其の社會其者の種類、性質を究明する必要ありとし、一般論の後、結局、單なる因襲傳統の保存に餘念なき社會に非ずして、意識的に進歩を期し、且つ社會各員相互の分有すべき共同興味を益々多様ならしめんとする民本主義的社會でなければならぬ事を説いて居る。即ち、教育はかゝる民本主義的社會の發展に適當すべきことを説いて居る。第二段（第六章より第十七章まで）に於ては以上の民本主義を標準として、兒童の經驗を連續的に改造し組織し直さねばならぬ事を主張し、此の改造は社會的意義内容を増進し、且つ此の改組織の指導者としての個々人の能力を増進する様な性質のものなるべきを述べて居る。又、此の社會的意義と個人的能力との兩面の區別を用ゐて、教材と教授法との各特色を明かにし、同時に、學習の方法は、經驗の材料の改造を意識的に指導する事であるが故に、教材と教授法との統一を必要とし、其の見地より學習の方法材料の主要原理に就て述べて居る。第三段（第十八章より第二十三章まで）に於ては、上述の民本主義的理想實現が現代に於て多くの

制限を受けて居る事を述べ、其の原因を、經驗を個々分立した興味領域より成るものと思ひ、且つ各領域は、其の孤立せる獨特の價值、材料、方法を有し、各領域が適宜に他より限定せられたる範圍を越えない限り、教育上に於ける一種の「權力の均衡」が構成せらるゝものなりと考ふる點に在りとなし、かくて此の價值や興味を分離對立の根底に横はる種々の假定を分解説明して居る。即ち實際的方面に於て、價值や興味を分立は、可なり固定的に區別された社會階級の存在に基くものであつて、是れが社會的交渉實際の自由と充實を妨ぐる所以であり、従つて、勞働と閑暇、實際活動と知的活動、人と自然、個人と社會、修養と職業等の如き色々な二元説や對立を構成する原因となつてを事を示してをる。尙是等數多の對立と同様の對立が、古代の哲學説にも在り、心又は精神と物質、肉體と心意、心と世界、個人と社會等の對立が、其の主要問題であつた事を指摘して居る。而して是等種々の分立の根底には、心理的條件即ち身體機關や、物質の方便や、自然物などを包含する活動から、人間の心を引き離して對立せしむると言ふ根本的の假定がある。従つて環境を制御指導する活動中に於ける心の起原、地位職分を認むる哲學を提示し、かくて再び初めに戻つて、人間の衝動、本能が、生物的に自然力と連續して居る事、心の成長が共同目的を持つた共同活動の参加に依る事、自然環境が社會環境に於て利用せらるゝ事に依つて吾々に與ふる影響、欲求や思考に於て個々人の異なる所を進歩的に發展しつゝある社會のために利用する必要、材料と方法との本質的統一、目的と手段との本質的連續、行爲の意義を認識し且つ吟味する思考

としての心意を認むる事等に論及し、是等の考方は、人間の睿智とは經驗の材料を行爲に依つて有目的に改造する事なりと見る哲學と一致し、二元的哲學の如何なるものとも一致せざる事を示して居る。第二十四章(教育哲學)は、以上の如く前、二十三章を概括したる後、夫れ等、教育の諸問題中に含まるゝ哲學諸説の總括的批評を試み、哲學は即ち教育の一般原理なりと定義し、又、哲學は知識の一種に非ず、思考の一種にして、他の種類の思考と同じく、吾等の經驗中に不確定な問題の存する事から發生するものであつて、其の特徴は、其の未決定な問題が、組織された興味や、制度的要求から成立して居る所の廣く行き渡つた社會事業や社會目的の中に見出さるものなりと言ふ事實に存する。故に種々相反せる傾向や興味を調和調整を遂ぐる唯一の方法は、人間の情的並に知的傾向の改變に依るものなるを以て、哲學は人間の種々なる興味を明瞭に組織すると同時に、興味を平衡をも保たしむるための觀察點及方法を提示するものである。又教育は單に望ましき改造に就ての臆説假想たるべきものでなく、必要なる改革を實際に實行する過程なるが故に、哲學は思慮深き實行々爲としての教育の學理なりと見る事ができようと言ふ主意を述べ、第二十五章知識論に於ては民本主義の下に於ける認識論、及び學校に於ける知識獲得の意義を論じ、最後の第二十六章道德論に於て德育の意義を明かにし以て、上來述べ來つた所を概括して居る。

教育に關する一般的理論に通ずる事は單に知的興味を點許りからではなく、實際教育に従事する者にとつて極めて必要な事であると思ふ。傳統的な型にはまつた教授法を盲目的に反復する事に

依つて能事終れりとなす様な教師には特に本書の熟讀をすゝめると共に、かくの如く大きな本書を敢て全譯された譯者の勞を多とする。東京、洛陽堂、出版、定價參圓八拾錢。(深田武)

寄贈書籍雜誌

社會學原理 文學士高田保馬著 著者
自我批判の哲學 野村悞野著 大同館

印度佛敎思想史 橋惠勝著 同
哲學雜誌、丁西倫理講演集、心理研究、東洋哲學六合雜誌、東亞之光、無盡燈、六條學報、早稻田文學、文化運動、學校教育、教育、内外教育評論、國民教育、教育研究、教育時論 現代教育、東京教育、京都教育、奈良縣教育、静岡縣教育、近江教育、岐阜縣教育、三重教育、信濃教育、佐賀縣教育、藝備教育、長崎教育雜誌、宮城教育、愛媛教育、秋田縣教育雜誌、

前號目次

支那の靈神に就て	文學博士 狩野直喜
シェリングに於ける絕對者の概念	文學士 久保正夫
無意識(完結)	文學士 千葉胤成
カントの歴史哲學(承前)	文學士 米田庄太郎
形式論理學の對象	文學士 安部晴之助
彙報	